2017年6月25日、中野教会・壮年会、「聖書学びの時」

聖書箇所：ヨエル書2:12-14

　　　　　　　　　　　　　　**「ヨエル書：主の慈しみ」**

　本日は旧約聖書のヨエル書からです。12小預言書の2番目の文書です。これら預言書の並べられている順序は時代順ということでもなく、配列理由はわかりません。ヘブル語旧約聖書でもこの順序です。なかでもヨエル書は独自の性格を持って居ます。これら小預言書は最初のところに筆者とその時代に関する記述があり、預言書成立時期を特定することができるのですが、ヨエル書については、父親がペトエルというだけで時代を特定する記述がありません。しかし内容や、言葉の使用から成立年代を特定する努力がなされてきました。まず、ユダヤ王国が滅亡しバビロニアに捕囚された後なのか前なのかと言う点です。両方の説がありますし、その理由ももっともらしいのですが、王国の滅亡が明確に過去の出来事として書かれていないこと、捕囚そして帰還を想像させる明確な記述がみあたらないこと、からして捕囚前とするべきであろう、と考えます。しかし、捕囚前と言っても、BC800年ころのユダ王国のヨアシ王の頃と言う説と、BC600年頃のユダヤ王国滅亡直前とする説があります。北からの脅威について書かれている、と解釈できないではない箇所も見られますが、全体的には国家存亡の危機というような切迫した時ではないようですので、BC800年頃の初期ユダヤ王国の時代の文書という説に組したい、と思います。しかし、その後の記述と考える方が自然である、と思われる箇所もあるため、BC800年頃成立してから、どこかで加筆された可能性はあると思われます。いずれにせよ、BC800年に成立した文書だとすれば、大預言書を含め、預言書の中で最も古いものとなります。いわば預言書の先駆けです。

　さきほどお読みしました箇所は2章の中ほどの部分ですが、ヨエル書の全体像を理解するためには1章から3章まで全体を見なければなりません。1:1-2:17まではイナゴによる大被害とそれを「主の日」の前兆と理解するヨエルの預言が語られます。2:18-27まではその被害からの回復の約束です。2:28－3:21の最後までが「主の日」についての預言です。そこには異教の民への裁きを含んでいます。全体を通して言えば「主の日」における裁きと救いに関する預言と言えます。この「主の日」の直前には大自然の恐るべき変動が起きます。それは新約の時代にも受け継がれ黙示録などで表されている終末の日の表現となって行くのです。イエス様も終末の時の状況を若干述べられました。

3節で子供たちにこの預言を伝えることが義務とされています。ヨエル書は最も古い預言書であり、かつ3章のみという短い文書です。また、聖書の内容を代々伝えることがユダヤ人の義務とされていましたので、ユダヤ人は皆、ヨエル書の中身を良く知っていたはずです。そのため、ヨエル書は旧約聖書のいろいろなところで引用されています。若干の例をあげます。ヨエル書の3:16には「主はシオンから叫び、/エルサレムから声を出される」とありますが、ヨエル書の次にあるアモス書の1:2に全く同じ表現があります。

また、ヨエル書3:10には「あなたがたの鋤を剣に、/あなたがたのかまを槍に、打ち直せ」とあります。これは裁かれるべきツロ、シドン、ペリシテの人々に対し、“農具を武器に代え、エルサレムに来い。そこで最終的な裁きを行われる”と「主なる神」がおっしゃられるところです。これがミカ書4:3やイザヤ書2:4では逆に武器を農具に代え、戦いはもうしない、という表現として使用されます。有名な箇所ですのでお読みいたします。「主は国々の間をさばき、 多くの国々の民に、判決を下す。 彼らはその剣を鋤に、 その槍をかまに打ち直し、 国は国に向かって剣を上げず、 二度と戦いのことを習わない」とあります。この戦争放棄の表現は、国際連合設立の願いを表現したものとして、国連ビルに掲げられています。戦争放棄は人類の願いである、ということです。しかし、ここで申し上げておきたいことは、ヨエル書の表現が他の文書の中にしばしば現れる、ということです。引照箇所が記されている聖書をお持ちの方は、ヨエル書のいろんな箇所に聖書の他の文書の参照箇所があることに気づくと思います。いわばヨエル書は預言書の古典とも言うべき存在です。

このことは新約聖書についても言えます。まず最も有名な箇所として、ヨエル書の2:28-32までがあります。お読みします。「その後、わたしは、 わたしの霊をすべての人に注ぐ。 あなたがたの息子や娘は預言し、 年寄りは夢を見、若い男は幻を見る。/その日、わたしは、しもべにも、はしためにも、 わたしの霊を注ぐ。/わたしは天と地に、不思議なしるしを現す。 血と火と煙の柱である。/主の大いなる恐るべき日が来る前に、 太陽はやみとなり、月は血に変わる。/しかし、主の名を呼ぶ者はみな救われる。 主が仰せられたように、 シオンの山、エルサレムに、 のがれる者があるからだ。 その生き残った者のうちに、 主が呼ばれる者がいる」とあります。これがペンテコステの聖霊降臨直後のペテロの説教で引用されています。「使徒の働き」2:17-21までです。「年寄りは夢を見」と「若い男は幻を見る」が前後逆になって引用されているとか、「使徒の働き」では、ヨエル書32節は「主の名を呼ぶ者は救われる」で終わっている、とかの変化はありますが、ほとんどそのままで引用されています。この「主の名を呼ぶ者は救われる」はパウロのローマ書10:13でも引用されています。

更に、ヨエル書3:13には「かまを入れよ。刈り入れの時は熟した」とありますが、黙示録14:18では、「その鋭いかまを入れ、地のぶどうのふさを刈り集めよ。ぶどうはすでに熟しているのだから」という形で引用されています。

ヨエル書で「主の日」というのはKeyWordといえる言葉ですが新約聖書でも終末の日のこととして語られます。第一テサロニケ5:2、第二テサロニケ2:2-3、第二ペテロ3:10、黙示録1:10の5節に現れます。第一テサロニケ5:2をお読みします。「主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです」となっています。ヨエル書1:15でも「主の日は近い。全能者からの破壊のように、その日が来る」と言っています。ちなみに「全能者」というのは「シャダイ」であり、「破壊」は「ショドゥ」ですのでこの2語はごろ合わせになっています。詩文においてはその韻を合わせるため、このようなことがしばしば行われます。ヨエル書には、外にも、文の前と後ろをひっくり返して記述し、音楽的表現にするなど詩的表現が数多くあります。おそらくヨエル書はユダヤ教徒の礼拝においてしばしば皆で唱えられたりしたからではないか、と思われます。いずれにせよ、新約時代のユダヤ人にとってはヨエル書は大変親しみのある文書であったと推測されます。

　では1章から見てみましょう。4節にイナゴとバッタがでてきます。イナゴというのはバッタの一種で喉仏があり、それ以外のバッタはこれがない種類と言われています。バッタのヘブル語表現には10種類くらい、あるそうです。新改訳ではこのいなごとバッタが区別されているように訳されていますが、ヘブル語では４つのバッタを表す表現が使われています。「ga:zam」、「arbe:」、「yereq」、「ha:si:r」の4種です。このうち「arbe:」が聖書で最も良く使われている単語です。語源は「無数」とか「群れ」という意味だそうです。口語訳聖書をみるとこの4種がイナゴの種類として、きれいに訳し分けされています。「噛み食らうイナゴ」、「群がるイナゴ」、「とびイナゴ」、「滅ぼすイナゴ」とされています。要するに徹底的に噛み砕かれてしまう、ということです。イナゴの害と言うのは大変な事のようで、世界の歴史の中でも惨憺たるありさまが記録されています。1915年のパレスチナにおけるバッタ被害が有名です。当時のオスマントルコでは一人20kgのバッタの卵を集めることを国民に義務化して、広がるのを抑えるのに躍起になった、という記事があります。この群れにあったらすべての動物が死滅するとともに、畑の作物も全部やられてしまう、という大変なもののようです。どうもこれがBC800年ころのイスラエルで起きたようです。実は私はむかし、イナゴの佃煮というのを食べ、これが大変おいしかったので、あまり恐怖感はないのですが、集団になって襲ってきたら人間なんかひとたまりもないでしょう。

5節で酔っ払いに「泣け」と言っていますが、イナゴの大群でぶどう畑がやられ葡萄がとれなくなったため、葡萄酒がなくなったことをいっているのです。そして6節で「一つの国民がわたしの国に攻め上った」とあります。BC800年ころの状況で言えばアッシリアが台頭してきていた頃です。しかしヨエル書ではまだアッシリアを脅威として叙述しておりませんので、当時しばしば北王国をおびやかしていた、都市国家ダマスコか、フェニキアの都市国家シドン、ツロが想定されるところです。「預言」として記載されていますし、「数えきれない国民」と表現し、「雄獅子」という表現も考慮するとアッシリアのこと、という想定も成り立ちえます。「いなご」は神様の裁きの手段です。イスラエルの民の出国を許可しないエジプトのパロに対しイナゴの大群がエジプトの全土を蓋うという大災害が起こされたことが出エジプト記に記録されています。ここでのイナゴは旧約聖書では最も一般的な「arbe:」です。その後、イナゴは第二歴代誌7:13で主がソロモン王に対し「もし、私が---イナゴに命じてこの地を食い尽くさせた場合」といって神の裁きの一つの手段としてイナゴの大群を送ることが書かれています。こちらのイナゴはヘブル語で「ha:ga:b」と称し、ヨエル書に出てきたイナゴ、バッタとは別の言葉です。ヨエル書でいなごが大量発生し、それで象徴される異国の侵入は神の裁きの表現なのである、ということです。ここに、アッシリヤによる北王国の滅亡、新バビロニアによる南王国の滅亡、新バビロニアに次ぐペルシャによる支配などの場面に於いて異国の王を主なる神が用いてイスラエルを裁く、という聖書における預言書・歴史書の特徴がここに現れていると言えます。このことは大変なことです。古代に置いては、神は民族神ですから、異国の王が自国の神の僕（しもべ）などということはありえません。神々の戦いの結果が王国間の勝敗なのです。イスラエルの信仰は絶対的唯一神ですから、異国の王も「主なる神」の最終支配の下にある、との考えからこのような解釈になるのです。当時のオリエント宗教では大変独自です。もちろんキリスト教における神も同様です。

　8節から主の裁きの下にあるユダヤの悲惨な状態が語られます。「荒布」が8節のおとめ、13節の祭司の所に出てきますが、これは深い悲しみの表現です。イナゴのために、捧げものとする穀物も葡萄酒もなくなってしまったのです。12節の最後で「人の子から喜びが消え失せた」とあります。「人の子ら」は直訳しますと「アダムの子ら」で「本来の罪なき人間」を指すメソポタミアの神話に由来するという解説もあります。「人の子」の表現は旧約聖書でもかなりでてきますが、特別な場合を除き一般的には「主の民」と置き換えられます。新約聖書での「人の子」の表現に至るまでには種々の意味が付加されていきます。ヨエル書での「人の子ら」即ち、主に従う民、ユダヤ人から喜びが消え、ユダヤの国も見るも憐れな地となったというのです。もう「主に向かって叫ぶ」しか手はありません。

そしてここで「主の日」は近い、と言われます。いままでのは前兆で、これから「主の日」が起きる、というのです。19節で「主よ、私はあなたに呼び求めます」とあります。20節では「野の獣もあなたにあえぎ求めている」と言っています。主に頼むしか、残された希望はありません。この「主に日」とはいつ起きることなのかについては黙示録の千年王国との関連もありキリスト教の中で諸説があります。要するに、ヨエル書に預言されている「主の日」と主イエス・キリストの来臨、ペンテコステの日、主イエスの再臨の時、との関係如何、ということです。1:15の「主の日」と2:1の「主の日」については「その日は近い」と言われています。2:11の「主の日」は「偉大で、非常に恐ろしい」と言われていますが、文の続き具合からみて2:1の「主の日」と同じと考えなければならないでしょう。これらの「主の日」は全く、主なる神の裁きの時で、ヨエルは「近い」と理解していた、と考えられます。現在の目から見ると、アッシリアによる北王国の滅亡、そしてその時点での南王国のアッシリアの属国化、即ちBC720年頃のことをヨエルは想定していたと考えられます。「主の日」は3:14にもう一つあります。この箇所は異邦人の国が滅ぼされイスラエルの支配がエルサレム、シオンの丘で再確立される日ですから所謂「終末の日」です。新約の世界では終末の日は主イエス再臨の時です。新約聖書では「主の日」はすべて終末の日であり主イエスの再臨の時です。従って、「主の日」は主の顕現の日であって終末の日には限られないことになります。ペンテコステの直後のペテロの説教で引用されている箇所である2:29の「その日」はペンテコステの時であり、「主の日」である、と解釈してさしつかえなさそうです。更に新約後の教会の歴史の中で主の復活の日、即ち日曜日を「主の日」とする慣行が出来上がって行ったようです。とにかく、ヨエルにとってみればまずもって「主に日」は裁きの時であり、2:12以下の悔い改めにより、イスラエルにとっては救いの日でもあるようになった、と解することができます。

ヨエル書の最後はイスラエルの回復の表現で終わりますが、これは「主の日」に起きることです。3:18-21では「その日、山々には甘いぶどう酒がしたたり、 丘々には乳が流れ、 ユダのすべての谷川には水が流れ、 主の宮から泉がわきいで、 シティムの渓流を潤す。/エジプトは荒れ果てた地となり、 エドムは荒れ果てた荒野となる。 彼らのユダの人々への暴虐のためだ。 彼らが彼らの地で、 罪のない血を流したためだ。/だが、ユダは永遠に人の住む所となり、 エルサレムは代々にわたって人の住む所となる。/わたしは彼らの血の復讐をし、 罰しないではおかない。 主はシオンに住む。」と記されています。最初の「その日」は当然「主の日」です。シティムはヨルダン川が死海に流れ込むところの東側で豊かな地とされていたところです。この主が住まわれる国こそ新約では「神の国」です。「神の国」の到来こそが福音です。良きおとずれです。従って、さきほどのヨエル書での「主の日が近い」という表現は福音書における「神の国は近づいた」と同じです。ヨエル書における「近い」はヘブル語で「qa:ro:b」ギリシャ語で「egu:s」です。マタイ3:2「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」の「近づいた」は「qa:rbe:」、「e:giken」ですが、ヨエル書のヘブル語、ギリシャ語の動詞形です。ルカ10:9の「「神の国が、あなたがたに近づいた」」の「近づいた」も同様です。なおこの「近づいた」は“すぐそばに来ている”という意味である既に到来している、と理解しても全く差し支えない言葉です。ここに所謂「未だと既に」の問題があります。「神の国」は来るべき時でもあり、既に到来した国でもある、ということです。

　ついで、2:12には「主の御告げ」という言葉が出てきますが、これは預言を始める時の定例句です。この表現が特に多いのはイザヤ書、エレミヤ書、エゼキエル書です。小預言書でも、アモス書8:11に「神である主の御告げ」というのがあります。ヨエル書が預言書のひな形的な存在であったと考えられます。

13節には「心を引き裂け」という表現があります。着物を引き裂くのは怒りや嘆きの表現ですが、それを着物ではなく心即ち心臓を引き裂くと言っているのですから、その嘆きの程が知れる、というものです。このような表現は聖書でここだけです。そして「主は情け深く、憐み深く、怒るのに遅く、恵み豊かで、わざわいを思い直してくださるからだ」という「愛の神」が表現されます。これぞ「神は愛なり」そのものです。「情け深い」、「憐み深い」、「恵み豊か」と訳されている語はヘブル語ではそれぞれ「ha:nun」、「rahu:m」、「hesed」です。これらの言葉は極めて微妙な意味合いをもっており、日本語訳もそれぞれです。口語訳は「恵みあり」、「憐みあり」、「慈しみ豊か」です。新共同訳は「恵みに満ち」、「憐み深く」、「慈しみに富み」です。更にフランシスコ会訳は「恵み深く」、「憐み深い」、「慈しみに溢れ」で新共同訳と極めて近い訳です。新共同訳はカソリックとプロテスタントの共同作業でしたから、フランシスコ会訳をまねたのかもしれません。どうも共通な訳し方はなさそうですが、概していうと、「hanu:n」は恵み、「rahu:m」は憐み、「hesed」は慈しみに通じている、ということが言えそうです。神様の性質は「恵み深く、憐み深く、慈しみ深い」ということです。この3つの単語の内、聖書に独自の言葉と言えるのは「hesed」です。一般的には「慈しみ」と訳されています。「慈愛の神」ということです。「慈しみ」と言うと、神様から人間に向かうことのみ考えがちですが、「hesed」の原義は「共同体的義務」であり、統一、連帯、忠誠の意味もあります。イスラエル共同体への忠誠という意味合いです。イスラエル共同体はヤハウェを頂く共同体ですから、主なる神への忠誠、即ち、信仰ということです。ユダヤ教徒が必ず唱えなければならない祈りにシェマーがあります。「聞きなさい。イスラエル。主は私たちの神。主はただひとりである。 5 心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」と言うところの“主を愛する”ということと同じです。神様は我々を愛するとともに神様を愛することを命じています。それがイスラエルの一員であることの証なのです。なおコーランの各章の最初は「慈悲深く慈愛あなねきアッラーのみ名において」ですがここでの「慈悲深く」と「慈愛あまねき」はヘブル語の「ha:nun」（恵み）と「hesed」（慈しみ）に対応している、と考えられます。

　2:13では神様の性質を表す表現として、更に、「怒るのに遅く」と「わざわいを思い直してくださる」とが挙げられています。「怒るのに遅く」は理解しやすいのですが、「わざわいを思い直してくださる」というのです。神様の決定はもう覆ることはありえない、というのが神様の性質である、と考えるのが通常です。ギリシャの神々のように人間的かつ多数の神々が居る場合、神様が決定を覆してもあまり奇異ではありませんが、イスラエルのような唯一超越神の場合は神様が「思い直す」というのは矛盾するように思えます。ここで「思い直す」ということばはヘブル語で「na:ham」と言い、そもそもは憐れむ、と言う意味ですが動詞変化のある一つの型は「悔いる」と訳すことができます。この13節ではこの「悔いる」の意味で使われているのです。神様が悔いるのです。聖書の神様が思い直したケースはいくつかあります。代表的なのは創世記18章にあるソドムのお話しです。これは神様がソドムを滅ぼすことを決定しますが、アブラハムの“正しい者もいっしょに滅ぼされるのはおかしいではないか”という訴えに神様が答えて条件とする正しい人の人数を50人から10人にまで落としていく話です。結局、10人の正しい者もおらず、ソドムの滅亡が結論となるのですが、この間の神様の思い直しが重要です。なぜでしょうか、「ヘセド」です。神様は人間を慈しんでくれるのです。神様から人間に向かうヘセドです。もちろん、その応答としての人間から神様に向かうヘセドもあります。

私たちも嘗ての自分はいつも神様に「思い直し」を求めていたのではないでしょうか。しかし、主イエス・キリストは私たちの罪を背負ってくださいましたので、もう神様は私たちの罪を見ないことにされたため、神様の側からの思い直しの必要はなくなっています。それは主イエスの「hesed」によるものです。私たちは、「hesed」で応答するよう求められています。本日の最後の節は新改訳では「主が思い直して、あわれみ」と訳されていますが、口語訳では「立ち返り、思い返して」と訳されています。原語も「shu:b」と「na:ham」です。従ってヨエル書では「shu:b」が「立ち返る」の意味で使用され、「na:ham」が「思い直す」の意味で使用されていると一応言えそうです。新改訳2:14だけは「思い直す」と「あわれむ」と訳されています。このことは意味的にはこの２つの言葉は共通部分が多い、とも言えます。

ここに出てきた２つのヘブル語、「na:ham」と「shu:b」は実は新約聖書で「悔い改める」と訳されている言葉の旧約聖書での２つの表現なのです。「悔い改める」という言葉はギリシャ語で「metanoe:o」と言いますが、その対応のヘブル語には「na:ham」と「shu:b」の二つがある、ということです。「na:ham」は「慰める、思い直す、憐れむ、悔いる」という意味、「shu:b」は「立ち返る、戻る」という意味です。「悔い改める」の「悔いる」は「na:ham」から来ています。「悔い改める」の「改める」は「na:ham」の「思い直す」の意味から来てる、ということも「shu:b」の「戻る」の意味から来ている、ということも言えます。「shu:b」の「立ち返る」は「向き直す」の意味ですから「改める」に通じます。なお「shu:b」に対応するギリシャ語には「epistre:fo」（立ち返る）という言葉が対応している場合もあります。ではどうしてこの2つのヘブル語が新約の世界では「悔い改める」という意味のギリシャ語になったのでしょうか。どうも鍵になるのはアラム語のようです。イエス様に時代のイスラエルの民ではシリアの言葉であるアラム語が一般的に使われていた、と言われています。実は旧約聖書のアラム語訳でみると、この２つのヘブル語はアラム語では両方ともアラム語の「shawa:」ヘブル語の「shu:b」になっています。そしてアラム語辞書をみると「na:ham」にのみあった「悔いる」という意味がアラム語「shawa:」にもあります。従って、「na:ham」と「shu:b」の２つのヘブル語がアラム語の「shawa:」で一つの言葉となり、ギリシャ語の世界では「悔い改める」（metanoe:o）と「立ち返る」（epistre:fo）の2つとなる、と言えます。「悔いる」の意味を含んでいる「na:ham」にしても「慰める、あわれむ」が中心的意味であり「悔いる」は付随的意味です。更にいえば日本語の「悔いる」のように「後悔する」という意味合いはほとんどなく「遺憾に思う、思い直す」というような意味合いです。結局、新約聖書でいう「悔い改める」という言葉は「思い直して立ち帰る」という意味で理解すべきです。“あー私はあんなことをしてしまって後悔します。何とわたしは罪深い人間なのだ”と罪ある行いを悔いるのが「metanoe:o」なのではなく「思い直して主なる神に立ち帰る」ことなのである、ということです。情緒的なことではなく、信仰的な姿勢の事なのです。この世で価値ありとされるものを求めることから神の義に向き直り主の僕の道を歩むことです。人間の罪は人間性そのものに深く根ざしており、悔やんで態度を改めて解決できる、というようななまやさしいものではない、ということでもあります。

2:18以降でいなご等による災難からの回復の約束が語られ、2:28から最後までは全体として「主の日」に起きることの描写です。主による裁き、とイスラエルの回復です。いくつかの重要な箇所については既にふれましたが「聖戦」の部分について若干追加で述べます。3:9-11では「諸国の民の間で、こう叫べ。 聖戦をふれよ。勇士たちを奮い立たせよ。 すべての戦士たちを集めて上らせよ。/あなたがたの鋤を剣に、 あなたがたのかまを槍に、打ち直せ。 弱い者に「私は勇士だ」と言わせよ。/回りのすべての国々よ。 急いで来て、そこに集まれ。 －－主よ。 あなたの勇士たちを下してください---」と言われています。「聖戦をふれよ」と訳されている部分は直訳しますと「戦いを聖とせよ」です。主なる神が戦われる聖戦に参加せよということです。この戦いの相手は主なる神に反抗した諸民族です。そして弱き者である主の僕は武器をとり、主が送られる勇士とともに主なる神の裁きの一翼を担うのです。これが、ミカ書になりますと、3:5と4:3を続けて読みますと、「預言者たちについて、主はこう仰せられる。 彼らはわたしの民を惑わせ、 歯でかむ物があれば、 「平和があるように」と叫ぶが、 彼らの口に何も与えない者には、 聖戦を宣言する。/主は多くの国々の民の間をさばき、 遠く離れた強い国々に、判決を下す。 彼らはその剣を鋤に、 その槍をかまに打ち直し、 国は国に向かって剣を上げず、 二度と戦いのことを習わない。」となっています。ミカは「平和があるように」といっている偽善的預言者には聖なる戦いを宣言せよ、と言っています。ヨエル書とは聖戦の相手がちがいます。そしてミカ書では主の裁きの結果、武器は無意味なものとなり、平和の営みに勤（いそ）しめということです。ヨエル書とミカ書では表面的には矛盾していることを言っているように見えますが実は異なる局面において「聖戦」や「武器」について述べられているのです。ヨエル書にしても主の日に我々が武器をもって戦うことを勧めているのではなく、主の日には、弱き者である我々に武器が与えられ強き者とされる、ということを言っています。聖戦はあくまでも主なる神が戦われるのであって、私たちが戦う戦争ではありません。私たちの武器は心強く持つための道具にすぎません。なお、イスラム教にも「聖戦」（ジハード）という考えはありますが、コーランでは大ジハードと称せられるのは自己の欲望に打ち勝つ戦いのことです。小ジハードと言われるのが異教の民との戦いです。大ジハードはあくまで霊的な自らとの戦いのことであり、武器をもったこの世の戦争とは全く関係ありません。異教徒との戦いである小ジハードにしても、必要最小限にとどめ敵に寛容であれ、と言われています。異教徒に対する攻撃的戦争を正当化するのは屁理屈的コーラン解釈のように思います。もっともキリスト教の世界にも屁理屈的戦争正当化ははびこっており、「聖戦理解が間違っている」などとイスラム教を非難することができる状態ではありません。イスラム教よりひどいかもしれません。

その他、預言書の先駆けであるヨエル書には旧新約聖書を理解する上での言葉が多々ありますが、ヨエル書は後の預言書の基本的パターンである「罪」、「苦難」、「裁き」そして「回復」というイスラエルの救いの道を示している点を指摘し、お話を終わります。一言、祈ります。